

rose

Shunji Kawamoto

川本俊二（かわもと しゅんじ）

1968年、広島生まれ。

『rose』で第28回文藝賞受賞。

現在、天満屋広島店勤務。

rose (ローズ)

1992年 1月10日 初版発行

1992年 3月24日 4版発行

著 者 川本俊二

装 丁 菊地信義

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷 2-32-2

電話：3404-1201(営業) 3404-8611(編集)

振替口座 (東京) 0-10802

印刷 大日本印刷株式会社

製本 小高製本工業株式会社

©1992 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります。

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN 4-309-00739-2

**r
o
s
e**

(
ロ
ー
ズ
)

決して自分から進んで足を踏み入れたわけではなかった。流れの中、何者かに背中を押され僕の足は前へ前へと進んだのだ。新大阪と言う声を耳にし、窓側に座っていた僕は、反射的に席を立ち、隣の四十過ぎの疲れた顔をしたサラリーマンも、僕の動きに反射的に組んでいた足をゆっくりと直し道を空け、僕は流れに入った。やはり下車しない方が、と迷いながらも僕は背中を押され、プラットホームの上に産み落とされた。

今、二度と来る事はないと思っていたこの街に僕は着いた。この三月、大学を卒業し、先に送った荷物に引っぱられるように、僕は大阪を離れた。広島に向かう新幹線が動き出した時、僕は微かな揺れを感じたが、時間が経ち速度が増すにつれてその揺れは気にならなくなり、引越し疲れからか、いや、もう頭の中には何も思い描きなくなかったから、ゆっくりと漂うように攻め来た睡魔に頭の中を自ら明け渡した。睡魔に頭の中の所有権を譲り渡す途中で、僕は大阪には二度と来る事はないんだろうなと感じた。それなのに、それから一月しか経っていな

い今、僕は再びこの街にいた。

昨日の夜あの電話がかかって来るまで、僕は再び大阪を訪れる事になるとは夢にも思っていなかった。電話は叔母からだった。二日前に家出したいところが、大阪で補導されたので引き取りに行つて欲しいとの事だった。入院している叔父の付き添いがあるので、叔母は広島を離れるわけにはいかず僕に頼んだのだった。大阪の大学に通っていたのだから大阪の地理には詳しいだろうと僕にその役目が廻つて来たみたいだが、電話を取った母からその話を聴かされた時、僕は仕事があるからと一度は断つた。だけどすぐに思い直しそれを引き受けてしまった。どうして思い直してしまったのか、僕自身その時ははつきりとはわからなかった。でも今日になって大阪へと向かう新幹線の中で色々考えてみたが、第一僕がこの役目を選ばれたのは大阪の地理に詳しいという理由だけではなく、親類縁者の中で僕が一番暇そうに見えたからだろう。一応僕は仕事に就いている。大学卒業後も就職先が未決定だった僕は、父の口利きにより自動車工場の工員として三月の終わりから働いていた。正式な社員というわけではなく臨時採用、つまりはアルバイトという形ではあったが一応は社会人だ。なのに僕が暇を弄んでいるように思われたのは、きつと僕がその仕事に興味もやる気も持っていないように思われたからだろう。

自動車工場で働き始めてから一月が経とうとしているのに、僕は、ボルトの締めつけが甘いなどと先輩の工員、中卒で四歳も年下の暴走族くずれのような男に小言を言われ、仕事を覚えぬ気がないのかと怒鳴られ尻に蹴りを入れられる。その度に、僕は頭上を移動する出来くさし

の車両をそいつの空っぽ頭目がけて落とす夢を見る。鉄の固まりに身体を直撃され下敷きになったそいつの体内からはみ出した、生暖かい血まみれのまだピクピクしてる生きた臓物を油まみれの鉄くずが付着した安全靴の底でジリジリと踏みにじる光景を頭に思い描きながら、知らず知らずの内につま先で床を踏みにじっている。監督はミーティングの後僕一人を残し、いくら大卒とはいえここでは一番の新入りなんだから中卒だろうと高卒だろうと年下だろうと先輩の言う事はきちんと聞け、この仕事を馬鹿にしてやる気が出ないのなら作業の邪魔になるからさっさと辞めてしまえと言った。監督の言う通りだった。大卒で、周りの工員達より年上という事だけの、作業をする上では何の価値もない、みみっちいくだらないプライドが、薄暗く、蒸し暑い鉄やサビや油や真つ赤な顔の口から吐き出される濁った息の臭いの中で、汗と油で汚れた深い緑色の作業服に身を包んで働く彼らを見下し冷笑していた。

彼らの方が僕なんかよりも肉体的にも精神的にも遥かに強靱なものを持ち得ているだろう。もしも戦争や氷河期にでもなれば彼らは僕みたいなあらゆる面で弱い人間なんかよりずっと頼りにされ、愛され尊敬されて、彼らこそが正義としてエリートとして崇め奉られ、その時代に君臨するのもかもしれない。僕のような我がままで身のほど知らずの無能力者は今の日本のようなとりあえずは経済的に豊かで政治的に平和で、その事がしばらくは無事に続くのではと考えるような無邪気で無責任な社会だからこそ、ニコニコと笑っていられるのだ。それを考えれば、笑っていられるというのは今の日本のとりあえずの繁栄に僕はたまに赤ん坊のように笑う事を

御許し戴いたようにも思われ、このように何の取り柄もなく日本国のお役に立てない私を生かしておいて下さり真に感謝します、今後は無気力な生活を悔い改め勤勉な日本国民の名に恥じないよう汚^{けが}さないよう精進してまいりたいと思いますと、最大級の謝意を照れ笑いする事なく、我らが日本の輝かしき繁栄と未来のために表したかった。

梅田の街を歩いていると紺やグレイのリクルート・スーツに身を包んだ学生達が目についた。その誰もが、別にこんな街中で人事の人間が彼らの行動をチェックしているわけでもないのに、背筋をピンと伸ばし、澄まし顔で足早に通り過ぎて行つた。男は精悍に、女は清楚に見えた。彼らをそんな風に見せているのは、仕事に対するやる気や将来に対する希望や期待だけではなく、臆^{おそ}げな、しかし希望や期待をも容易に打ち砕く不安のためだろう。去年の今頃は僕も、こうして僕と擦れ違つたり追い抜いて行く学生と同じように紺のリクルート・スーツに身を包み、梅田や北浜や本町といったオフィス街を歩いていた。でもその時、僕の胸の中に一体何が存在していたというのだろうか。大きな期待も大きな不安も僕にはなかった。毎日送られて来て下宿の狭い部屋をゴミ箱に変えた就職情報誌やダイレクト・メール。朝昼晩かまうことなくかかつて来る、いやがらせとも思えるような企業からの電話。そして周りの学生の表面的な動きに惑わされ、何が何だかわからない内に予め購入するつもりだったような顔して買った着慣れない紺のスーツを身に着け、成人式の時以来締めた事がなかったレジメンタルのネクタイを不細工に結び、初めての就職活動の日の朝によくサイズを確かめもしないで急いで買った黒のプレ

ーン・トゥーの靴を踵と親指と小指の部分を靴擦れさせながらも我慢して履き、まるでそうしなければ流行に乗り遅れてしまうような感じだった。事実、就職活動は大学四回生の間では一番の流行で関心事だったし、何か特別な理想を持った学生以外の者の間では必ずといってよいほど伝染病みたいにそれは流布し、内定を貰った順にその病魔から解き放たれるのだ。僕にもやはり病気が移った。将来に対するはつきりとした展望を持たぬままに。将来など未来など僕には何も見えなかった。見ようとしてもしていなかった。はつきりと見たくはなかったのかもしれない。僕は逃げていたのかもしれない。それでも生きて行くためには働かなければならないとはわかつていた。適当な給料と休みが貰えて大卒者の職場として一般的に認められた所ならば、どこだってかまわないぐらいにしか頭になかった。この会社でなければならぬ、こんな仕事やりたいんだ、というようなはつきりとした理想が僕にはなかった。何一つはつきりしたものが僕にはなかった。それはそれまでの大学生活を通じずっとそうだったし、その四年間の大学生生活を最も上手く象徴していたのが僕の就職活動だった。

「久しぶりだな」と僕は警察署を出た所で修おさむに話しかけた。

高校一年生になったばかりの修は、大阪駅に着いてすぐに補導されてしまった。志半ばでの挫折がよほど悔しかったのか、頬を膨らませ、唇を尖らせ、僕との何年ぶりの再会を喜ぶそぶりなど全く見せなかった。僕が話しかけても、ただ小さく頷くだけで、ひとことも声に出し

て返事をしようとはしない。

「叔母ちゃん、修のこと凄く心配してたぞ」と僕はふて腐れた顔した修の家族に対する情に訴えてみたが、修の反応は相変わらずだった。

警察で修の顔を見るまで、僕は彼が家出少年というだけでなにか凄く柄が悪く成長した姿を想像していたが、実際に引き渡された修は別に変にグレているわけでもなく、まだ垢抜けていない、子供っぽい、切れのない顔つきをしたどうって事のない真面目そうな、どこにでもいる十五歳の少年だった。

「大人しいんだな。」

「えっ？」修は初めて僕の言葉にはつきりと反応を示した。

修ぐらいの年頃の少年は性格に関する事、それも自分が弱い人間であるように言われると、過剰とも思えるほど敏感に反応する。修も僕が思った通りの反応を示してくれた。

「昔はもっと元気があったのに、でかい声でギヤギヤ騒いで、俺にプラモデル作ってくれとか、野球しようとか言って遊んでたくせに。」

「もう、わしも大人じゃけえ、いつまでもガキミとうな事言うたられんよ」と修は広島弁で言った。

広島弁で話すのは少し恥ずかしかったが、修と打ち解けるためにはその方がいいだろうと思つて僕も、「お前のどこが大人なんじゃ」と広島弁を使った。

「高校生じゃけえ、もう大人よ。」

「高校生が大人じゃったら、俺はもう完全に大人じゃのう。」

「当たり前じゃろうが、何馬鹿な事言うとるん」と修は呆れた顔をして笑った。

僕はもう大人だったのか。自分では特にそう意識はしていなかったけれど、大学も卒業した二十二歳の男は世間一般からみれば充分大人だし、大人にならなければならないのだろう。

「茶でも飲もうか？」僕は年長者らしく年下の修を誘った。

無邪気に微笑んで頷いた修は子供のようなだった。

喫茶店に入り、僕と修が腰かけたテーブルの隣には三人の男がいた。神妙な顔つきのリクルート・スーツ姿の男子学生二人と、その向かいに座った、余裕を持ちニコやかな顔つきの若い男が、まるで三人の盗賊がこれから実行するおおきな盗みの相談をしているみたいな感じでなにか話していた。OB訪問の最中なのだろう、若くて人当たりのよさそうなリクルーターは、二人にしきりに固くならないでいいですよ、と言っていたが、買ってきたばかりのスーツを着て、ついさつき散髪へ行つて来てまだベビーパウダーの匂いがするような頭の二人は、近くに座った僕まで肩がこつてしまいそうほど緊張している様子だった。それを見ていて僕は、自分がこの二人と同じように緊張して大学の二年か三年先輩という人物と就職の話をした時の事を思い起こした。そういえば僕は彼らとは比べようもないほど緊張し、OBに何か質問はと尋ねられ、頬をひきつらせ、か細い声を震わせながら下らない質問をした覚えがあった。僕は

会社の雰囲気を見せて下さいと言ったのだったが、それについては既にそのOBが充分過ぎるほど語って聴かせてくれた話だった。人事の方から二、三日以内に電話があると思いますからと別れ際にそのOBは言ったけれど、それから一年近く経っても未だに連絡はなかった。

目の前でストローを口にくわえて息を吹き込み、半分になったオレンジ・ジュースをブクブク泡立てる十五歳の家出した高校生と、ほんやり昔を思い出している二十二歳のアルバイトの工員との間に共通の話題などなかった。年が近いから腹を割って話ができるだろうと叔母は言っていた。確かに叔父や叔母よりは修と年は近いが、僕から見れば修は随分年下だし、修から見れば僕は随分年上だろう。ここで僕が高校生だったときの話を修にしても仕方ないような気がするし、修の話を聴いたところで僕はきつと頷くだけにとどまるだろう。

どうしてこんな役目を引き受けてしまったのだろうか？ 理由をつけてただあの蒸し暑い職場から逃げ出したただけだったのではないだろうか？ とにかく僕と修の間には年の差という大きな隔たりがあった。世代のギャップというか、今生きているお互いの世界は大きくかけ離れていた。叔父や叔母と修との違いは日本とアメリカとの違いみたいなものがあるかもしれないが、僕と修との間にもデトロイトの工員とハリウッドの芸能人との違いみたいなものがある。修と打ち解けたいという意志はあったけれど、彼とどんな話をすれば良いのか僕にはわからなかった。

「何で訊かんのんね、家出の理由を？」僕が黙っていると、修はこれ以上の沈黙は耐えられな

いと言いたそうな顔をして、そう切り出してきた。

「何で家出なんかしたんや？」と僕は修が自ら望んだ質問をしてあげた。「家で何かあったんか？」

「いいや。」

「学校で何かあったんか？」

「いいや。」修は僕の顔をちらりとも見ようとはしなかった。

僕には別に修がどうして家出などしたのか、そんな事にこれっぽっちも関心はなかった。修に対して自体、それほど関心はなかった。僕が修にこの前最後に会ったのは親戚の法事の時、彼はまだ小学校低学年だったし、小さな子供をあやすようにして彼をかまっていればよかったが、まさか自分の事を大人だと思い込んでいる十五歳の機嫌を取るためにマンガの話もできないだろう。僕が知っていた修と今目の前にいる修とは、同じ面影を漂わしているもののきつと別人なのだろう。修と会わなくなつてから彼がその間どんな生活を送っていたか僕は知らないし、彼が家出したという知らせを耳にするまで僕の頭の中に修の存在はまるっきりなかった。貴様是谁だと目の前に座っている少年に叫んでみたかった。まるでOB訪問をしているみたいだった。つながりは同じ大学という事だけ。つながりは親戚という事だけ。

僕がまた黙り込んでいると、そんな僕にもう愛想を尽かしてしまったのか、修は黒い革のリュック・サックの中からヘッドホン・ステレオを取り出し耳に付けると大きな音で鳴らし始め

た。耳障りな金切り声のようなリズム音がシャカシャカと漏れてきて、隣の三人が一瞬厭な顔をしてこちらを見た。神聖な就職活動の邪魔をするんじゃないやねえ、この暇人が、と三人の目は語っていた。

そんな修を注意することもないままに、僕は胸のポケットから煙草を取り出した。煙草に火を点けるのを、修は物珍しそうに見ていた。僕は煙草のパッケージとライターを、頭を振ってリズムを取っていた修の目の前に重ねて置いた。砦を明け渡すかのようにヘッドホンを耳から外し、リズムを取るのをやめて、修は目の前に差し出された物をどうすればいいのかわからないような顔をして見つめ、そして、伺いを立てるような目でちらりと僕を見た。

「吸えよ、もう大人なんだろう」と僕は修に言った。

修はまだ一度も煙草を吸った経験がないのか、少し緊張した目つきで煙草を唇にくわえもせずに火を点けようとした。僕が微笑みを浮かべながら修に煙草の吸い方を教えていると、隣に座ったリクルート・スーツは、どこから見ても未成年の修が煙草を吸っているのに気づいて、まるで生活指導の先生のような怖い顔をした。

……お前だってこんくらいの時は煙草吸ったり、万引きしたり、スケベな本買つてオナニーしたり、満員電車の中で傍にいた若い女の体を見て欲情してちよつとぐらいだったら触っても大丈夫かな、と思った事があるだろう。嘘つくなよ……。

修は煙を吸い込む事を恐れているかのように、少しだけ口に含むとすぐに吐き出した。

「今時高校生にもなつて煙草も吸つた事がない奴なんて珍しいな」と僕は言った。

「吸つたことぐらゐあるわいや、毎日吸うとるわいや」と修は顔を赤くして必死に僕に訴えた。僕は一生懸命背伸びをし、強がる修が何となく可愛くてほくそ笑んだ。「何のカセット聴いとるんや？」少し気持ちが楽になつて修に尋ねた。

修は芸名か本名かはつきりしないような、余りインパクトのない、どこにでもあるような日本人の女性の名前を答えた。僕は修が言つたような名前の女性歌手は知らなかつたし、どんな歌なのか聴かせてもらつたけれど聴き覚えはなかつた。多分若いであろう女性歌手の歌が、歌謡曲なのかポップスなのか、それともロックなのか、その区別すらつかなかつた。修にこの歌の感想を尋ねられて僕は何と答えて良いものか考えあぐね、ただ顔に薄笑いを浮かべるだけだつた。やはり僕と修は住む世界が違つていた。

「修、お前もしかしてこの歌手に会おうとして家出したんか？」

「馬鹿、そんな訳ないじゃろうが、この子に会うんじやつたら大阪へなんか来んわいや、東京へ行くわいや。」

「それもそうよのお……」と僕は修の言葉に納得した。

「ほいじやが、それに近い理由じゃけどのお……」修はそうつぶやいた。

つぶやいた修の表情を、僕はいつかどこかで見た覚えがあるような気がした。誰かのそんな表情を……。

何か諦め難いものを諦めざるを得なくなってしまった時のように。どうしても忘れ去る事ができない思い出の中に、今なおその時の気持ちのままで取り残されている成長していない、しかし今の顔をした自分の姿を見てしまった時のように。一瞬にしてこの世界に存在する非を、罪を、悲しみを、たった一人で総て抱え込んでしまったかのように……。何ともいえぬ淋しい人。僕はその人の前でなす術もなく立ち竦む忌まわしき裏切り者。この世に存在する総ての価値観が、古い血で腐りかけた切れ味の悪いただ重いだけのギロチンの齒で、まだ誰の手にも落ちていない清らかな君の白く細い誰もが一度はくちづけを望んだその首を、何度も何度も傷つけようとする。僕は君こそがこの世において唯一の正義であると知っていた。僕のたった小さなひとことで自己満足的な邪悪な偽善者達の私刑から君を救い出す事ができると知っていた。でも僕は何も言わなかった。言えなかったのだ。なぶり物にされて君が君でなくなる瞬間、君は偽善者達の醜い顔の中に僕を見つけた。最後の望みを込めて無残に傷つけられた少し気の強かった君の初めて誰かに救いを求めた目から僕は姿を隠した。醜い顔をした奴らの影の中に。僕はこの世で最も呪われるべき卑しき臆病者だった。

修が僕に見せたそのやるせない思いを浮かべた表情を、僕は確かに見た覚えがあつた。

しばらくして隣の三人が帰ってしまい、またすぐにその席に今度は二人の男がやって来た。二人とも似たような感じのグレイのスーツを着ていたが明らかに二人の立場は異なっていた。